

主 題：女性のかぶり物②

聖書箇所：コリント人への手紙第一 11章8節－16節

きょうのテキストIコリント11：7をお開きください。

コリント教会の中のある女性たちが教会の中で「かぶり物」をしないで奉仕をしていたというのが問題でした。なぜそれが問題なのかというと、それはそれが主のみこころに反することであり、神の教えに反することだったからです。彼らの問題は、主のみこころよりも自分たちの考えに従って歩んでいたことでした。そこでパウロはこの「かぶり物」について神様の教えを与えます。

A. 神の定めた関係 3節

まず、パウロは神様が定めた三つの関係を表しました。一つは男とキリストの関係、二つ目は女と男の関係、そして三つ目はキリストと父なる神との関係でした。繰り返されている「かしら」ということばは、「首長」という意味でした。ですからある神学者はこれは「支配」や「権威」を表すと説明します。どちらかという、このことばは「上位と下位」、「上下の関係」や「支配と従属」、また「上官と下僚」というふうに、すべて上下の関係という意味を持ったことばです。そこでパウロはまず最初に、すべての男たちは創造主であるキリストに従う責任があると言ったのです。二つ目に「女のかしらは男」だと言いました。ということは教会においても、家庭においても男性のリーダーシップに女性が従う責任があるとパウロは教えます。そして三つ目に、キリストと父なる神の関係を挙げるのですが、イエス様が地上に人として来られた時、父なる神のみこころに完全に従っていかれた。ですからこの三つの関係をここに示すことによって、それぞれに与えられた従順という責任に忠実であるようにと、その大切さをパウロは教えるのです。

B. 神の定めた関係の実践 4－6節

1. 「男性はかぶり物を着けない」 4節

それを教えた上でパウロは、本題である「かぶり物」へと話を進めていきます。実際に「かぶり物」を着けるべきなのかどうなのか——。4節で、男性は「かぶり物」を着けないのだと彼は教えていました。「男が、祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていたら、自分の頭をはずかしめることになります。」と。男が主の権威のもとにあることを証ししたければ、しっかりと主の教えに従うことであって、「かぶり物」を着けることではないというのがパウロの主張でした。先ほど我々が見たように、神様は神に従うという責任を男に与えられた。ではどのように生きるのか——。「かぶり物」を着けることではなくて、主が言われていることに忠実に従っていくことだ、「かぶり物」を着けることは、かえって主のみこころに反することだとパウロは言います。そのようなことをするならば、あなたのかしらである主を「はずかしめることにな」と言っています。つまりそういう主を侮辱することをしてはいけないと言います。

2. 「女性はかぶり物を着ける」 5－6節

では女性かというと、5－6節に女性は「かぶり物を着けなさい。」と言っています。もしつけなければ「自分の頭をはずかしめることにな」るのだと。「かぶり物」を着けないという行為が主のみこころに反する行為であり、まさにその町に住んでいた多くの罪人たち、売春婦たちと同じことをしているのだと教えたのです。彼らは髪の毛を切ったり、頭をそったりしていたので、そういうことをしてはいけなさと。彼らの問題は男性と同じようになろうとするのです。

パウロは、神がお造りになった男女は平等だとします。しかし、それでいて、それぞれには異なった役割、異なった責任があるのだと繰り返します。きょうも何度もそのことを繰り返しているのは、それがパウロがこの箇所で特に教えたかったことだからです。パウロがそう教えるのですが、悲しいことにこういった主の教えを無視して、自分たちの勝手な解釈によって教会や家庭で歩む者たちがいた。その結果、いろいろな問題が生じていたのです。ですから教会の中で「かぶり物」をしない人たちの問題は、彼らは神様が定められた権威に従いたくないとすることだったのです。そしてそういう思いを抱いているから、それが行動となって出てきたのだとパウロは指摘するのです。

C. 創造のみわざ 7－12節

7節を見ると、パウロは再び「男はかぶり物を着るべきではない」と教えています。パウロは創造のみわざの順序から、その目的から、その役割から女性は「かぶり物」を着るべきだということを、男性はそうではないのだということを教えていこうとするのです。

1. 創造の順序から

- ・ 男は神の似姿であり

7節を見ていただきたいと思います。「男はかぶり物を着けるべきではありません。男は神の似姿であり、神の栄光の現れだからです。女は男の栄光の現れです。」と記されています。前回も見たように、どんな順番で神が人を造っていかれたのか、その創造の順番の話をするのです。神様が最初にお造りになったのは男、アダムでした。その時に創世記1：26で「神は、『われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。』と教えています。ですから、神がアダムを造る時にご自分に似たものとして、神様のご性質を私たちもいただいたのです。前回見たように、それは神様が私たちのようなからだを持っているということではなかったですね。こうして神様は私たちの先祖であるアダムを造られた。

・男性は神からの特別な務めをいただいた

また同時に、パウロは「男は神の似姿」と言っています。似た者として造られただけではなく、「神の栄光の現れだから」と記しています。つまり男は「神の栄光」をこの世で現す存在として造られたということです。ですから先ほど見た創世記1：26の後半に「そして彼らに」、アダムだけではなくその後続く者たちにも「海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう」と。ですから男性に与えられたのは、神が造られた物を支配し、そういったものをすべてちゃんと治めるようにという責任だったのです。ですから男性はその働きをすることによって、「神の栄光」を現すことができましたのです。なぜならこれが主がアダムに命じた命令だったからです。そしてよく考えてみると、治めるという責任はその後もずっと男たちに与えているものです。教会を治めることもそうだし、家庭を治めることもそうだし、それが男たちに与えられた大きな責任です。ですから、私たち男性が覚えなければいけないのは、主が与えてくださったこの務めを忠実に果たすならば、このことを通して「神の栄光」を現していくということです。

* 「女は男の栄光の現れです。」とは？ 7節b

この7節の注目すべきところは7節の後半でした。男は「神の栄光の現れ」だと言って、その後「女は男の栄光の現れです。」と言っています。では女性は「神の栄光」を現さなくていいのかということではありません。男女ともに「神の栄光」を現すのです。でもあえてパウロは「女は男の栄光の現れ」だと記したのです。このように記すことによってパウロが教えたかったのは、神様からすべての被造物を支配するようという務めをいただいたのはアダム、男でした。そしてその務めを果たすために、その働きを助けるために与えられたのがエバだったのです。ですから彼女の助けによって、アダムは神の栄光を現すことができる。与えられたその務めを、責任をしっかりと果たすことができるということです。神様の栄光を現そうとしている夫を助けることによって、妻は主の栄光を現すだけではなく、夫の栄光も現すのです。こうして夫婦ともに神が喜んでくださる、そのことをパウロは教えるのです。

つまり、それぞれに異なった責任があるということです。ご主人が救いにあずかっていない場合はどうしたらいいかということ、皆さんが神の栄光のために主が教えることを神の助けをもらいながらしっかりと実践することです。それがすばらしい証です。また既婚者ならば夫の權威に従うというのは、ご主人がクリスチャンだからという条件は書かれていないということです。女性は男性を助ける責任をいただき、そのような務めに神様が着かされたということです。男女には異なった責任、異なった務めがあるということです。

・男性が最初に造られた 8節

8節を見てください。「なぜなら、男は女をもとにして造られたのではなくて、女が男をもとにして造られたのであり、」とあります。「なぜなら」という接続詞が言うように、当然この7節の話を8節で説明しています。創世記2：7を見ると、神様がアダムをどんなふうにお造りになったのかが記されています。「その後、神である主は、土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。」、神は地のちりからアダムを造られたのです。そして息を吹きかけることによってアダムが「生きもの」となった。これがアダムの創造の話です。しかし、女性を同じように造ってはいないということです。ここで造られたのはアダム、男なのです。女性の創造については21-22節に出てきます。「そこで神である主が、深い眠りをその人に下されたので——その人というのはアダムですが——彼は眠った。それで、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。こうして神である主は、人から取ったあばら骨を、ひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。」、女性が造られた後その女性をアダムのところに連れてきた様子が書かれています。23節「すると人（アダム）は言った。『これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。』」と。おわかりになったようにもちろん神によって造られたことに間違いはないのですが、創造が少し違うのです。ですからパウロがここで言わんとしていることは、8節「男は女をもとにして造られたのではなくて、女が男をもとにして造られた」、今我々が見てきたとおり、エバはアダムから造られたのです。

2. 創造の目的から 9節

では何のために造られたのか、目的について9節を見てください。「また、男は女のために造られたのではなく、女が男のために造られた」とあります。今見たのはどんな順番で男女が造られたのかです。この9節に創造された目的が書かれています。「男は女のために造られたのではなく、女が男のために造られた」、これがそれぞれの創造の目的なのです。男性が造られた目的はすべてを支配しなさいという神様の命令に従って歩むためです。では女性とはというと、創世記2：18に「その後、神である主は仰せられた。『人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。』」と書かれています。この時まではアダム一人だったということです。アダムとエバが同時に造られたのではないということです。アダムが造られ、そしてその後に神はエバを造られたのです。その目的はアダムのために「彼にふさわしい助け手を造ろう」と。20節「こうして人は、すべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけたが、人にはふさわしい助け手が、見あたらなかった。」、つまり主から命じられた働きをなしていくための「ふさわしい助け手」が必要だったのです。それでエバが創造されたのです。ですから女性が造られた目的は、男性を助けるためであるとパウロは教えているのです。

きょうのテキストに戻ると、パウロは順序を話し、目的を話した後、こう結論づけるのです。10節「ですから」と、「女は頭に權威のしるしをかぶるべきです。」と。「權威のしるし」って一体何のことかということ、ギリシャ語の辞典を見ると「妻に対する夫の權威の印」と訳しています。つまりこれは妻に対して夫が持っている權威の印なのです。だから妻の權威の話ではない。夫の權威を自分の頭にかぶりなさいと。この10節が命じていることは、私は夫の權威に喜んで従う、主の命令に服従することの証しを言っているのです。そのように生きなさいということです。ですからこの10節で「女は頭に權威のしるしをかぶるべき」だと言った時に、それをかぶるならばその人は、私は夫の權威に喜んで従うのだと、その責任をしっかりと担って、そのように私は歩んで行きたいのだと証することになるということなのです。

みことばはその逆、女性が男性を支配するということを神がお喜びにならないことを教えています。それはみこころに反することだからです。パウロは1テモテ2：12-13で「私は、女が教えたり男を支配したりすることを許しません。ただ、静かにしていなさい。アダムが初めに造られ、次にエバが造られたからです。」と言っています。今私たちがコリントで見ているのと同じように、パウロは順序だけでなく、男女が造られた目的を教えることでその務めをしっかりと果たしなさいと言ったのです。ですから、コリント教会のある女性たちがしていたように、私はそんなことに従いたくないとするのであれば、悲しいことにその人自身が神の栄光を現さないだけではない、そのことによって夫も神の栄光を現すことができないということです。

そして10節を見るとその後「それも御使いたちのためにです。」と続きます。パウロはあえてここで「御使い」、つまり天使たちを引き合いに出すのです。この天使たちというのは神に逆らった悪霊たちのことではないというのは皆さんおわかりになりますよね？悪霊たちは神に従うことは全く考えていない。神に逆らったのです。だからここで言われている「御使いたち」というのは創造された時から神様のみこころに従い続けている天使たちのことです。彼らは主のみこころがなされる時に喜ぶのです。例えば、ルカ15：10に「ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こる」と書かれています。こういうことですよ。ひとりの罪人が神によって救われた時にそれを見ている天使たちはその行為を大いに喜ぶと。主のみわざがなされる時に彼らは喜ぶのです。そうすると、あなたが神に従うその行為も天使たちが喜ぶのです。彼らもそのように生きようとしている。そしてあなたがそのように生きようとするならば、天使たちも喜ぶと。だから、この10節でパウロはあえて主に従い続けている「御使いたち」を引き合いに出して、あなたたちも同じように主の前を正しく歩んで生きなさいと教えるのです。

私たちが今まで見てきたことは、男とキリストの間に、男と女の間に、キリストと神の間に確かにこういう縦の関係が存在したということです。そして女性たちに対して、あなたたちが神から与えられた責任は男性たちのリーダーシップに従うことだと教えたのです。

3. 異なった役割 11-12節

そのことをあえて語った上で11節の初めは「とはいえ」ということばで始まっています。「確かにそうだ」、それが神様のみこころであると語った上で、11節で「とはいえ、主にあっては、女は男を離れてあるものではなく、男も女を離れてあるものではありません。」と言っています。「離れてある」ということばが2回繰り返されています。これは「人なしには」とか、人だけではなくて物や協力、そういう何かなしにはできないということです。ですから女は男なしではだめだし、男も女なしではだめだ、お互いが必要だということです。先ほども見てきたように、夫婦という関係において妻は助け主として与えられた以上、その助けは夫にとっては不可欠だということです。夫が神の栄光を現すために一生懸命歩んで行く時に、そこに間違いなく妻の助けが必要だと。ですから神様の栄光のために歩んでおられる

皆さんは間違いなく共通して言われる。それは、こうして私が歩めているのは妻の助けがあったことだと。自分がやったと言うのではない。その助けがあるからできていると。そのことを言っているのです。

また同時に、妻には霊的なリーダーが要るのです。どういう方向に向かって進んでいくのか、どのようにこういう問題でもしっかり正しく対処するのか、一体何がみこころなのか、それを明らかにしてリードしていくような、そういった霊的なリーダーシップも、どちらも必要なのだと。助けも要るし、自分を引っ張っていくリーダーも要ると。教会を考えた時も同じことが言えます。男女の働きというのは異なるのです。男性にしかできない働きもあるし、女性にしかできない働きもあるのです。なぜこういう11節が書かれたのかというと、これまで見てくると男性が偉くて女性がそうでないかのような誤解をしてしまう人がいるからです。パウロが教えているのは、とんでもない、お互いに必要なのだと。ですから彼が言いたいことはどちらが偉いのか、どちらが重要なのかという話をしてしているのではないのです。なぜなら神の前にどちらも重要でどちらも価値があるのです。

12節に「女が男をもとにして造られたように、同様に、男も女によって生まれるのだからです。しかし、すべては神から発しています。」とあります。非常にユーモラスなことを言います。「女が男をもとにして造られた」、つまりアダムとエバの話です。「同様に、男も女によって生まれる」、アダム以外の男は全部女から生まれてきたのです。つまりどちらも必要だということです。どちらも神によってなされるみわざだと言っているのです。ただ繰り返しますが、どちらにも異なった務めが与えられているということです。男性だったらよかったとか、女性だったらよかったという話ではありません。神様はあなたを男性として、女性として造ったのです。その責任をしっかりと覚えてその責任に忠実であることをパウロは教えるのです。

D. 創造による証言 13-16節

こうして、パウロは女性が男性の権威に従う理由を創造のみわざから、説明してきました。その創造の順序から、創造の目的から、その役割から話をしてきたのです。

1. 創造の妙 13-15節

そして次に13節を見ると、今度は創造物による証言、神がお造りになったものがまさに今話している女性が男性の権威に従う理由を説明していると教えます。何を教えているかということ、ここで言っているのは髪の毛の話です。13節「あなたがたは自分自身で判断しなさい。」、パウロが言いたいのは、使徒である私がこのようなことを教えるから、あなたたちがそれを聞くというのではなくて、あなたたちは自分で判断できるでしょう？よく考えてごらんください。そして「女が頭に何もかぶらないで神に祈るのは、ふさわしいことでしょうか。」、考えてみなさいと言います。信仰的に考えなくても常識的にわかることだと言うのです。そしてその後に出てくるのが14節「自然自体が、あなたがたにこう教えていないでしょうか。」、「自然自体が」——神様がお造りになったこの自然界の秩序や法則がパウロが教えようとしていることを明らかに示しているというのです。

それは何かというと、髪の毛の話です。「男が長い髪をしていたら、それは男として恥ずかしいことであり、女が長い髪をしていたら、それは女の光栄であるということです。」とあります。こうして髪の毛の話になっていきます。こればかりではありませんが、男女を見分ける方法の一つは髪の毛でしょう。後ろから見た時に男性なのか女性なのかわからない。少なくとも多くの人たちが、長い髪をしていると、その美しさでああ、女性だなということがわかります。これは短ければだめで長ければいいという長さの教えをしているわけではありません。少なくとも女性の特徴です。男性が同じように長くしていても、同じではありませんよね。一般的にも髪の毛は女性のいのちであるかのような表現が使われるくらい、独特なものです。

パウロがここで「男が長い髪をしていたら、それは男として恥ずかしいこと」だと。先ほども言ったように、では男はすべて短髪でなければいけないのか、長髪ではだめなのか、そんなことを言っているのではないと言いましたよね。なぜかということ、実は4節「男が、祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていたら、自分の頭をはずかしめること」になると。なぜパウロがこんなことを教えたのか思い出してください。男が女と同じように頭にかぶり物を着けているとしたら、それは恥ずかしいことだと。なぜかということ、まず一つ目にそれは主の教えに反することであり、二つ目にそれは女性がやることをしているからだ。なぜならベールをかぶる、かぶり物をするのは女性だけだったからです。女性と同じようにしているから恥ずかしいと言っているのです。14節で「男が長い髪をしていたら」というのは、つまり女性と同じようにしていることは恥ずかしいことだと言っているのです。なぜか説明します。今お話ししていることはこの後を見るとわかります。女性に対して神様は長い髪を与えられ、「それは女の光栄であるということ」だと。なぜなら神はかぶり物として女に与えられているからです。パウロが言いたいのは、神様は女性に特別にこの美しい髪の毛を与えられたと。先ほどもお話ししたように、国や時代

を超えて女性は長い髪とその美しさに特徴づけられています。そしてパウロはこう言うのです。なぜこのすばらしい美しい髪の毛が与えられたのか、その目的は「なぜなら、髪はかぶり物として女に与えられているからです。」とあります。女性を特徴づけるこの長い髪、なぜ神様がそれを女性に与えたかという、そのことによって女性が造られた目的をちゃんと彼らが覚えるためだったと言うのです。ですから、パウロがずっと言っていることは、創造の順序によっても、創造の目的によっても、創造の役割によっても女性は男性を助けるという役割が与えられている。そして神がお造りになったこの自然界の秩序を見てもはっきりしていることは、神様は特別に女性にこの髪の毛を与え、まさにそれは生まれつき持っているかぶり物だと。そのことによってあなたの務めを忘れないように、それを覚え続けるように、そのようにして神様は髪の毛を女性に与えたのだと。

きょうも女性は男性に仕える者なのだということを繰り返し皆さんにお話してきました。女性の権利を主張する人々は余りこれを快く思わないでしょう。女性は奴隷ではありません。男性の奴隷ではないのです。でも我々はみんな主の奴隷なのです。救われている者たちは男女ともにこの方の言われることに従うのです。それが我々主によって救われた者たち、もっと言えば主によって造られた者たちの責任です。コリント教会の問題というのは、自分たちだけに関心が向けられていたのです。自分の考えることが優先されて、常に自分のことは最優先であり、周りの人々に対する愛は疎かになっていました。周りの人々がどう思うかなんてどうでもよかった。だからパウロは確かに自由は与えられているけれども、兄弟姉妹の霊的成長を優先して正しい選択をするようにと教えたのです。すべてのことを神の栄光のためにするように、そのように歩いていきなさいと教えたのです。この教会に存在していた救いにあずかっただけなら男女ともみんな平等であって、私が男性のすることをして何が問題があるのでしょうかと、自由じゃないですかとする人々に対して、パウロはそうではないということを言ったのです。それは神のみこころに反することであり、主のみこころはこれだと教えてくれたのです。

私たち天に上がって栄光のからだをいただくまでの葛藤は、主のみこころに従うのか、自分の思い通りに生きていくのかということです。なぜなら我々の肉は、我々の罪は自分の思いどおりに生きていこう、そのように私たちを誘惑するのです。そこに本当の喜びや満足が、本当の幸せがあるかのように私たちを誘惑するのです。でも気づかなければいけないのは、そこにはないということです。なぜなら人間は自分の思いどおりにずっと生きてきたのです。創造主なる神を無視して好きに生きてきた。そこに何があったのかです。もしそれが本当の幸せや満足をもたらすのだったら世の中の人みんな幸せになるはずですが、好きなように生きてきたのですから。生まれながらに私たちは親を完全に無視して好きに生きていくと、そうやって生きた人もたくさんいるでしょう。そこに何が、答えは言うまでもないでしょう。いいです？私たちの一番大きな問題は、神を無視して、神に従うことなく自分の思いどおりに生きていこう、そこにこそ何かあるのではないかと、そこにこそ祝福があるのではないかと、そのようになうそを私たちが信じ込んでいることです。あなたが本当の幸せと本当の満足を得るには、生きていてよかったと思うのは、あなたを造ってくださり、あなたを生かしてくださっている神様のみこころに従う以外にないということです。パウロがこのみことばを通して私たちに教え続けてくれていることは、一体何が神のみこころかということです。

2. 結論 16節

それぞれに与えられた責任をしっかりと覚えてそれに従っていきなさい。教えに対して、みんなが快く歓迎しないことをパウロは知っています。16節「たとい、このことに異議を唱えたがる人がいても、」と、そういう人がいるのです。神様のみこころを聞いてもいや、私はそうは思わないとか、それに従いたくないと。人間の罪の核心がそこにあるのです。神には従いたくありません、私の人生だから好きに生きていきますと。それが罪なのです。でもパウロはこう言うのです。「異議を唱え」というのは、「争い好き」という意味です。パウロが言っていることに争いをもたらそうとするのです。そのことに対して、パウロはそれを受け入れようとしなかった。そういう人がいたとしても、「私たちにはそのような習慣はないし、神の諸教会にもありません。」と。つまりあなたたちが「異議を唱え」てあなたたちが主張することは、我々十二使徒たちの間の教えでもないし、教会で教えられている教えでもない。それはあなたたちが勝手に思っていることであり、あなたがただしたいと願っていることであり、神のみこころではないということをパウロは最後に言うのです。パウロが与えられたレッスンを通して言いたかったことは、女性に与えられた大切な責任は男性に仕えて彼らを助けることであるということです。

パウロはコリント教会に女性はかぶり物を着けるようにと教えました。それは教会の中に救われた者は男女平等だからかぶり物を着けずに男性と同じように公で働いている女性たちがいたからです。皆さん、覚えてください。この当時の社会において、男の権威に従うことを象徴したものはかぶり物、ベールだったのです。しかもそれを身に着けることは習慣だったのです。そういう社会だったのです。それを着けることによって夫の権威に従っているのだ、そのことによって女性たちは守られたのです。パウ

口はこういう社会にあって、先ほど言ったような理由で、教会でベールを外すような女性たちに対して、今まであなたたちが守ってきた、また昔からの習慣だからそれを身に着けなさいと教えたのではなくて、夫の、男の権威に従うということは主の教えだから、ベールを着けるようにと教えたのです。世の中の人には世の習慣だけでしていたのです。パウロはそれが主の教えだから、あなたたちはベールを着けなさいと言うのです。

恐らく皆さんがこの学びを通して一番関心があるのは、では私たちのこの時代において、この社会において、このみことばが教えるように私たちもベールを着けるべきなのかどうかということだと思います。結論を言うと、パウロはそういうことを言ったのではありません。なぜそういうことを言っていないのかというと、これはあくまでその夫の権威に従うことを象徴したかぶり物、ベールを着ける習慣のもとに歩んでいた社会だったからです。今の私たちはそういうものはありません。だから私たちにベールを着けることを教えているのではないのです。私たちが覚えなければいけないのは、着ける、着けないということではなくて、パウロがここで何を教えたかったのか、彼の教えの真意というものをしっかり覚えることです。それは、女性たちは男性の権威に従って、彼らが主の栄光を現す務めを助け続けていきなさい、それがあなたたちの務めだからです。習慣だからではないのです。それは主の教えだから、私は喜んでその務めを果たしていきます、私は自分の夫が神の栄光を現すために喜んで主に従っていく助けをしますと。教会の中にあっても自分に与えられた責任をしっかり果たしていきます。神に従うことによって、私は自分の務めを果たしていきたい、それがパウロが言わんとしたことです。習慣が違います。でも言わんとするメッセージの真意は変わっていない。

皆さんお気づきになったように、どのみことばを見ても、みことばが常に私たちに教えるのは、これが私のみこころだ、あなたはそれに従うかが問われていますでしょう？どこを見てもそうです。結局そういうことなのです。みことばは好きに生きていいと教えていません。それは罪が私たちになすわざです。みことばは私に創造主であるわたしに従えと言うのです。あなたを救いに導いたわたしに従いなさいと。そこに主の祝福があるからです。もっと言えば、その生き方だけが、私たちが造られ、生かされ、救われ、この日が与えられたその目的を果たすからです。神の栄光を現す生き方です。だから私たちは、こうして集まった時に誰が偉いかと言っていざり合うのではありません。みんな神の前に平等なのです。お互いに異なった務めをいただいている以上、その務めをしっかりと主の助けをいただきながら果たしていきなさいと教えてくださっている。主の助けをいただきながらそれを実践するので。それが主が私たちに教えてくださることです。